

## 自然育苗用土・養分による稲の育苗の疑問とトラブル対策

(有)花巻酵素 2012-001 版

作業等	疑問・トラブル	対 策
カビについて	自然育苗用土または自然育苗養分の袋を開封したらカビが生えていた	当社製品に発生するカビは原料の発酵に使用している発酵菌によるものです。病原性のものではありませんので種もみや苗には全く無害です。そのまま使用して問題ありません。
	苗箱の床土にカビがはえた	○当社製自然育苗用土の場合 自然育苗用土をそのまま育苗箱に入れた床土に生えたカビは原料を発酵した発酵菌のものなので問題ありません。灌水またはプールへの入水で消えます。 ○当社製自然育苗養分を自家製自然土に混合 自然育苗養分に含まれる発酵菌の影響でカビが生える場合もありますが問題はなりません。灌水で消えます。病原性のカビの心配がある場合は病気の抑制効果のあるプール育苗を行ってください。
床土準備	殺菌に不安がある土を床土に使用した	できるだけプール育苗を行ってください。プールへの水入れは普通 1.5 葉ごろですが、播種後 5~8 日、出芽後の緑化が終わったらすぐに行います(詳細はプール育苗の項を参照)。細菌病等の抑制になります。
出 芽 (育苗機)	育苗機の温度管理について	必ず 25℃以下に設定します。20℃でも大丈夫です。中心部に温度計をセットして温度を監視します。  <div style="text-align: center;"> <p>温度計の例</p>  <p style="display: flex; justify-content: space-around;"> <span>ガラス温度計</span> <span>デジタル温度計</span> <span>デジタル温度計 (コード式)</span> </p> </div>
	苗箱の床土の温度が 30℃以上になった	すでに出芽が見えていても高温障害が起きて出芽が遅れ生育不ぞろいになる可能性がありますので、未出芽でもすぐに全部の苗箱を育苗機から出してハウスに並べて温度を下げます。保温用のシートは掛けますがあまり保温し過ぎないようにします。
	苗箱単位で出芽しているものと出芽していないものがあり出芽が不ぞろいだ ※【高温障害による出芽遅れの例】参照	温度設定に関わらず床土に発酵熱が発生して 30℃以上になり高温障害が起きている可能性があります。特に積重ねた苗箱の上の方が出芽していて真ん中のものに未出芽が多ければ高温障害の可能性が高いです。この場合、未出芽でもすぐに全部の苗箱を育苗機から出してハウスに並べて温度を下げます。保温用のシートは掛けますがあまり保温し過ぎないようにします。
	※育苗機から出してハウスに並べる場合の管理	“出芽(ハウス平置き式無加温《ベタ張り》)”を参考にしてください。

作業等	疑問・トラブル	対 策
出 芽 (積重ね)	苗箱単位で出芽しているものと出芽していないものがあり出芽が不ぞろいだ ※【高温障害による出芽遅れの例】参照	床土に発酵熱が発生して高温障害が起きている可能性があります。特に積重ねた苗箱の上の方が出芽していて真ん中のものに未出芽が多ければ高温障害の可能性が高いです。この場合、未出芽でもすぐに全部の苗箱をハウスに並べます。保温用のシートは掛けますがあまり保温し過ぎないようにします。
	積重ね出芽の温度管理について	積重ね出芽には特別な加温は必要ありません。普通に保温する程度でよいです。 出芽期間中に積重ねた中心部の温度が発酵熱で30℃以上の高温になりやすいので、中心部に温度計をセットして温度変化に注意します。高温になるようなら積重ねた上部と中心部の苗箱の入れ替えを何回か行います。
	※ハウスに並べる場合の管理	“出芽(ハウス平置き式無加温《ベタ張り》)”を参考にしてください。

### 【高温障害による出芽遅れの例】



苗箱の中心部分が高温になっているために出芽が遅れている




苗箱の中心部分が高温になったために出芽遅れになった



内側部分全体が高温になったために出芽遅れになった

〔※高温障害で出芽が遅れたモミは死んでおられませんので温度が落ち着けば出芽してきます。最終的には正常に生育した苗にほとんど追いつくようです。〕

作業等	疑問・トラブル	対 策
<p>出 芽 (ハウス平置き式無加温 《ベタ張り》)</p>	<p>平置き式無加温出芽の<u>温度管理</u>について</p>	<p>緑化が終わる頃までハウス中心部の苗箱に温度計を常時差し込んでおき温度を監視します。</p> <p style="text-align: center;"><u>温度計の例</u></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>ガラス温度計</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>デジタル温度計</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>デジタル温度計 (コード式)</p> </div> </div> <p>出芽前に苗箱の床土の温度が発酵熱で 30℃以上になり苗が高温障害をおこして出芽遅れになる場合がありますので、温度計が 30℃を超えた場合は次項の <u>“苗箱の床土の温度が 30℃以上になった”</u> 場合の対策をとって温度を下げます。</p>
	<p>苗箱の床土の温度が 30℃以上になった</p>	<p>すでに出芽が見えていても高温障害が起きて出芽が遅れ生育不ぞろいになる可能性がありますので、上から灌水して温度を下げます。保温用のシートを薄くしあまり保温し過ぎないようにします。特に温度が高い場合は多めに灌水し、プール育苗の準備が出来ていればプールに水を 1.5cm 位に入れて温度を下げます。</p>
	<p>苗箱単位で出芽しているものと出芽していないものがあり出芽が不ぞろいだ ※【高温障害による出芽遅れの例】参照</p>	<p>床土に発酵熱が発生して高温障害が起きている可能性があります。出芽していない苗箱の床土内の温度を測っておよそ 30℃以上あれば高温障害です。この場合、苗箱に灌水し温度を下げます。また保温用のシートを薄くしあまり保温し過ぎないようにします。特に温度が高い場合は多めに灌水し、プール育苗の準備が出来ていればプールに水を 1.5cm 位に入れて温度を下げます。</p>

作業等	疑問・トラブル	対策
育苗 (プール)	プールに使用する水について	水道水、湧き水などの清潔で雑菌の無い水を使用します。ため池などで濁っているような水は雑菌の心配がありますので使用しません。また、湧き水で水温が低い場合は水温を上げてからプールに入れるようにします。
	プールに水を入れる時期について	出芽後の緑化が終わったらすぐに入れます。苗はかなり早い時期から細菌病等にかかりやすいので、水入れは緑化直後が良いです。
	プールに水を入れる前に苗に病気が発生した	プールへ水を入れる前に苗立枯細菌病などの障害が見え始めた場合はすぐに水を入れます。病気の拡散が抑えられる可能性があります。水温は 28℃以上にならないようにします。
	水の深さについて	初期は苗箱のへりまでで、あまり深くは入れません。最終的には育苗箱の上 1cm 位に入れます。今までの陸育苗の灌水方式とは全く違いますので、最低でも苗の茎の下の根がいつも完全に水に隠れているようにします。ただし、緑化直後で苗の出芽長が短い時は浅く入れ、苗の生長に従って水位を育苗箱の上 1cm 位まで上げていきます。
	水の入れ替えについて	水の入れ替えは全く必要ありません。水が濁ってきてもそのまま構いません。減った分の水を足すだけでよいです。
	プールの水は田植えまで入れておいて良いか	プールの水は田植えの前日に落水した方がよいでしょう。田植えの前日に落水しておけば苗箱の水がある程度抜けて運搬作業が楽になります。万が一田植えの予定がずれた時は再びプールに水を入れておきます(水温は低すぎないこと)。それ以上前に落水しますと根が空気にふれて苗にストレスとなり田植え後の活着に影響しますのでおすすめしません。
育苗 (慣行の灌水方式)	苗に病気が見え始めた	<p>可能であればすぐにプール育苗に切り替えます。病気の拡散が抑えられる可能性があります。</p> <p>※ 苗箱の下にシートを全面に敷いている場合はシートの外周の下に幅・直径が 10cm 前後の木材や塩ビ管を差し入れて外枠にしプールを作ります。そして、苗箱のへりの高さまで水を注ぎ込みます。シートの裂け目や継ぎ目からの多少の水漏れは水を継ぎ足せば問題ありません。</p> <p>※ プール育苗の詳細はその項を参照して下さい。</p>